松岡正子著

中国青藏高原東部の少数民族

チャン族と四川チベット族

ゆまに書房／2000年9月／417頁／5000円

金丸良子

一九四九年一〇月に中華人民共和国が成立した。しかし、新生中国は社会主義国家体制を採用したため、自由に中国と往来することが不可能になった。その後、日中平和条約が締結されるなどして、徐々にではあるが日中相互間の友好訪問や交流が実施されるようになってきた。その結果、一九八〇年代後半になると中国の各大学に留学して語学などを研修することができるようになった。さらに一九九〇年代中頃から、これまで外国人が自由に立ち入ることが厳禁されてきた対外「未開放地区」も多くが開放されだした。これを受けて、制約や規制が残るものの、従来に比べると外国人研究者がフィールドサーヴェイを実施しやすくなってきた。

このような政治的な流れに沿って、中華人民共和国成立後、日本人研究者を含む外国人研究者が実施する少数民族に関する研究は、以下のように三段階の大きな変化が生じた。

その第一段階は、中華人民共和国成立後から、一九七〇年代までの期間に該当する研究である。すなわち、中華人民共

和国成立後、外国人研究者が中国国内においてフィールドサーヴェイに従事することはもちろんのこと、友好訪問すら自由に行なえなかった時期においては、中国の少数民族研究はもっぱら中国人研究者が書いた論文や新聞記事などを参照あるいは依存したりしなければならなかった。しかも、中華人民共和国成立当初は中国人研究者自身がフィールドサーヴェイを実施する余裕があまりなく、著しく研究成果に乏しかった（そのうえ、当時のフィールドサーヴェイの調査報告は大部分が内部資料の扱いを受けており、外部の研究者にとっては入手困難であった）。そのため、外国人研究者は中華人民共和国成立以前に刊行あるいは発表された内外の研究者の書物や論文、さらには正史や地方誌（志）などの漢籍史料に全面的に頼らざるを得ないという状況であった。したがって中国の少数民族に関する研究は質・量ともに多くはなかった。

その後、一九八〇年代に入ると友好訪問という形式ではあるが、少数民族居住区を短期間参観することや少数民族を直接訪問する目的の旅行が可能となった。そしてそれらの参観や団体旅行を通じて、中華人民共和国のもとでの少数民族の生活の一部が具体的に知られるようになった。つまり第二段階のはじまりである。その結果、研究者間や一般の人びとの間で、中国の少数民族に興味・関心を有する人びとが増加した。それにしたがって、非常にわずかではあるが中国の少数民族研究を専門とする研究者が輩出したり、日本文化の源流を中国――特に西南中国の少数民族地帯――に求めようとする研究も行なわれるようになった。このような研究状況が約十年弱ほど続いた。

さらに一九八〇年代末になると、このような研究状況に大きな変化が生じた。中国での語学研修を主体とする留学が可能になったことである。その結果、中国で語学研修を行なった学生あるいは若手研究者の中から、中国の少数民族に興味・関心をもつ人びとがでてきた。これら中国で語学研修を行なった人びとは、懇意になった中国人研究者などの協力を得て少数民族居住地区に単独でフィールドサーヴェイに出かけるようになった。しかしながら、少数民族居住地区のほとんどの地域が当初は対外「未開放地区」に指定されているという制約があり、フィールドサーヴェイは困難をきわめた。一方、この時期になると少数民族に興味をもつ中国人留学生が多数来日し、日本人研究者の指導を受けて中国の少数民族研究に従事する者が増加した。

本書の筆者である松岡正子助教授は、管見による中華人民共和国成立後の少数民族研究上の第三段階に所属する代表的な研究者である。松岡助教授は一九八八年から二年間四川大学の歴史系に留学し、民族学を研修すると同時に中国語も学習された。したがって、第一段階の研究者が主として中華人民共和国成立以前と同様に漢文で書かれた、いわゆる漢籍史料を中心に、また第二段階に所属する研究者（現在では五〇歳代の研究者）が、中国語を充分に話せないため、通訳に頼ってフィールドサーヴェイを実施しているのに対して、中国語で調査を行なうことができるという利点を有している。しか

も、主として第二段階の研究者の多くにみられるように、科学研究費などの補助金を得て、集団でフィールドサーヴェイを実施するのではなく、松岡助教授に代表されるように単独で行なっている研究者が増加傾向にあることもこの段階の研究者の特色といえる。

さらに、同じフィールドを季節を変えて十数回にも及ぶフィールドサーヴェイを繰り返し実施されてきた。この点は、対外「未開放地区」の規制が大幅に緩んだために実施できたと推察されるが、生業形態など生産関係を重視する調査の場合、異なる季節のフィールドサーヴェイを行なうことは必須のものといえよう。つまり、本書はこのように度重なるフィールドサーヴェイで入手した資料を用いて論を展開しているという特徴を有している。この点は、とりわけ少数民族に関しては諸資料の不備が多いので、非常に有効な分析手段であるとともに、説得力に富む内容となっている。

以上のような点から、本書は中国に分布・居住する少数民族研究——特に西南中国に居住する少数民族研究——に関して、現時点でもっとも研究水準の高い研究書であるといえる。現在、対外「未開放地区」の指定解除が進展するなど、少数民族に関するフィールドサーヴェイについては調査研究条件が飛躍的に良好な方向に進んでいる。そのような意味からも、本書は研究者——特に大学院生および若手研究者——に多大の刺激を与えてくれる書物であると断言できる。

すなわち、再度繰り返すことになるが、本書は西南中国における少数民族研究に新たなる地平を開拓した研究書であるといえる。とはいうものの、調査期間や調査地域に関して種々の制約が存在するため、この点より生じた内容の不備が存在することも事実である。さらに、それ以外にも更なる検討を要すべき内容も存在する。以下ではこれらの点に特に留意しながら、本書の内容を順次検討していくことにする。

本書は、以下のように構成されている。

序（李紹明）
写真資料
はじめに
第1章　先行研究とその問題点
第2章　チャン族の概況
第3章　事例研究　四川省阿壩藏族羌族自治州理県蒲溪郷蒲溪村における変化の諸相
第4章　周辺のチベット族
註
おわりに
研究文献目録

本文の前におかれている写真資料は一六頁にも及び、すべてカラー写真である。それぞれの写真にはキャプションが付けられており、理解を助けている。写真の内容は、本書の中心であるチャン族および四川チベット族（ギャロン・チベット族および白馬チベット族）に関するものである。写真は祭祀活動などの宗教行事のものも存在するが、自然環境や生業形態の写真が多くを占めている。この点は、従来の少数民族の写真などでよくみられる盛装した女性のみが写っている写真や、

祭礼を中心とした、いわゆる「ハレ」の日の写真が主体のものとは大いに異なっている。すなわち、本書の写真資料をみれば、華やかさこそ少ないが研究対象であるチャン族、四川チベット族の日常生活全般が直ちに把握できるように工夫されている。しかもそれが、本文の内容と非常に密接に関連づけられていることが判明する。

このように、本書は冒頭の写真資料により著者の意図が明確にくみとれるという点では成功している。ただし、表紙カバー、写真資料、中扉には同一の写真が使用されているものが存在することについては、著者は非常に多数の写真を撮影されておられるはずであるので、もうひと工夫してほしかった。なお、第1章よりはじまる本文中では写真ではなくイラストが多様されている。イラストは写真とは異なり、強調あるいは主張したいことを中心に描くことが可能という利点を有している。そのため、イラストを随所に挿入した本文はより説得のある文章となっている。できうれば図・表と同様にイラストにも通し番号を付け、イラストの目次を冒頭に付ければ読者にとって便利なものとなったと思われる。同様のことは通し番号が付けられている図・表に関しても該当する。これらの両点は、索引の作成も含めて機会があれば考慮を望みたい。

「はじめに」では、本書の研究視角が明確に論じられている。すなわちそこでは、宗教を筆頭とする精神文化全般にわたっては「筆者の民族言語能力のレベルや時間的な制約から判断して論ずることが難しい」(二八頁)との理由から、この項目に関しては研究を割愛したと述べ、生業形態や人口動態中心の基礎的調査が主体であると本書の研究対象を限定した点が論じられている。単独でフィールドサーヴェイを実施した場合、このように研究対象を明確にしぼるということは当然のことであるが、この点においても本書は成功しているように思われる。しかしながら、著者が「彼ら(チャン族、四川チベット族—金丸注)の『民俗誌』の作成を試みた」(二八頁)といわれるのであれば、著者が意識的に排除した宗教活動なども、内容の一部に組み込むべきであったのではないだろうか。さらにこの点とも多少関連するのであるが、本書のタイトル『チャン族と四川チベット族』は漠然としているように思われる。はしがきでも述べられているように論点をしぼっているとすれば、それをサブタイトルとして付けた方が、本書の内容が読者に即座に伝わるという点からもよかったのではないか。

第1章より本文がはじまっている。本章ではチャン族に関して先行研究業績とその問題点を中心に論じ、併せて本研究の意義なども論じられている。つまり、本章は本書の研究の導入部分とみなされよう。その中でも特に前者の先行業績に関しては内外の先行研究を丁寧に渉猟し、本研究の研究上の位置づけがなされている。この点は、大変詳細な巻末の研究文献目録などからも裏付けされている。しかしながら、研究文献目録には四川チベット族の研究業績も収録されているにもかかわらず、本章においては省略されてい

る。紙面などの制約があったことと推定されるが非常に惜しまれる。なお著者が今後の問題点として社会や文化の動態を視野に入れたチャン族研究が必要である（四三頁）との主張は同意できる。チャン族のみならず、このような研究視角は少数民族研究について考慮しなければならない問題提起だといえる。

つづく第2章はチャン族の概況説明を主体とした構成となっている。わが国にはほとんどチャン族に関しての専門的な紹介がなかったこともあり、本章の概況はチャン族に対する正確な知識しかも最新の情報を提供してくれており大変有益である。本章の地域の自然環境、歴史、交通、交易、生業、衣食住、葬式、年中行事という内容は、はしがきで述べられている著者の「民俗誌」の主要部分を構成するものであろう。なお「民俗」といえば自国民の伝統文化の研究を指すものとされ、著者のように日本人が異なるエスニック集団の伝統文化を研究する場合、その研究は「民族」と呼ばれることが一般的であると思われる。著者としては、このようなことは充分承知されて「民俗」という用語を使用されていると推察できるので、この点についても文中で説明してほしかった。

本章の内容では、最初に研究対象地域を含む周辺地域の自然環境について論じていることが特色としてあげられる。一般にフィールドサーヴェイを主体とした研究の場合、特に単独で調査・研究を実施しようとすれば時間などに大きく制約されることなどから、研究対象が一集落あるいは限定された範囲でのインテンシィヴ調査（「集中研究」、Intensive work とも称される）とならざるを得ない。そのため、せっかく大変詳細なフィールドサーヴェイに基づく調査・研究であっても、選定した研究対象地域がどのような場所に位置するかなどというような全体像が不明なことが多い。すなわち、研究対象地域の概況が同地域を調査・研究している研究者以外理解しにくいということになる。したがって極端な場合、本文を熟読しても内容を充分に理解できないか、あるいは著者の意図することが伝わってこないという危険が伴う。その点、最初に類書としては非常にめずらしいことであるが、研究対象地域を含む自然環境を記述していることは、研究対象地域がどのような自然状態の下におかれているかなどの全体像が把握しやすく、研究対象地域の土地感を読者に与える役目を果たしている。

とりわけ本書が研究対象としている地域は、少数民族研究を専門とする中国の研究者でも出かけたことはほとんどなく、外国人研究者としてははじめて訪問した集落や地域なので、このように地域の全体像を最初に示すという方法は、今後この種の研究書を上梓する場合、ぜひとも学習しなければならない論述方法であるといえる。しかも、図は鮮明で大変分かりやすい。図表を作成するのは非常に時間のかかる作業であるが、この点も前述のイラスト同様本文を親しみやすいものにしている。ただはじめにおいて述べられているように、自然環境の節だけは昭和女子大学田畑久夫教授（文化地理学専攻）が担当されたという。このように、

本文の内容を更に理解しやすくするために、特に技術的な面などで援助を必要とする場合、他の専門家に協力を求めることも今後研究書を出版されようとしている研究者にとって、必要ではあるまいか。この面からも本書は成功していると思われる。

歴史に関しては著者が歴史系に留学されて研修を重ねられたためか、要領よく紹介されている。しかし、チャン族の歴史に関しては漢族ほどの漢籍史料が豊富ではないことによると推察されるのであるが、史料吟味という作業を行なわないで直接引用されている点と、特に清代末期から一九九〇年代までの期間は本章が概況の一部であることなどを考えると、多少長すぎるのではないか、という危惧を感じた。なお、本章以外全般にわたっているが、例えば羈縻州（六三頁）や石碉（一一四頁）など難解なものにはルビを、「山客」（八一頁）や「黄糖」（八二頁）などは日本語にないものであるから、日本語に翻訳するか文中で説明を加えるべきであろう。

第3章ではチャン族の事例として理県蒲渓郷蒲渓村を分析されている。しかし同郷同村を研究対象として選定した理由が述べられていない。そのため、同村がチャン族のフィールドサーヴェイを実施する集落として典型的であるか、あるいは研究を実施する積極的な意義をもつかなどが不明である。さらに同郷は五行政村に分かれる（一六〇頁）とされるが、なぜ蒲渓村が選定されたか明確ではない。つまり、著者は同郷内において大蒲渓（行政的には上寨と下寨）がもっとも古く成立したので、大蒲渓村が所属する蒲渓村を選んだとされる。しかし、この集落がもっとも古い集落であるという証拠は提出されていない。これらの点は、本書第2章では自然環境をとりあげ、チャン族の全体像を明確にするという作業を行なって慎重に論を進めてきたのであるから、もう少し熟考されたらよかったと思われる。

なお第17図（一六一頁）では蒲渓郷人民政府の所在地が不明である。また同郷内の他の四行政村は示されているが、蒲渓村は下部（下位）行政単位の寨（組）のみ示されている。どちらかに統一して図示すべきであろう。さらに第9表（一六三頁）では下寨の個数が二六戸となっているが、第18図（一六五頁）には一九戸しか図示されていないし、上寨は図上では戸数が分からない。このように、読みとりにくいかあるいは説明文不足のものが多少みられるのは、図表が本書の特色の一つであるので残念なことである。

第2節の集落の形成は人口移動を中心に論じられたものである。著者が全戸調査で収集した資料を使って分析されているので具体性に富んでいる。続く第3節では蒲渓村と河壩村を事例として経済活動を論じておられる。しかし、事例としてとりあげられた家庭は典型的なものである（二〇五頁）と述べられているが、どのような意味で典型的なのか不明である。さらに蒲渓郷内の二行政村がとりあげられ展開されているが、その理由は両村の経済的な差に注目したとされる。しかし、主要道路に近い河壩村は経済作物が導入されても運搬が容易なため、高価

に販売することが期待できる経済作物の導入にふみきったと推定できる。すなわち、同郷内において両村に経済格差が生じた理由については言及されていない。この点についての指摘があれば、両村を選定したことが明確になったと思われる。第4節は「ガル」に焦点をあわせて論じられている。「ガル」を筆頭とする年中行事は中華人民共和国成立後中断されており、その内容はあまり知られていなかった。この点からも本節は興味深いものとなっている。

第4章はチャン族の周辺に分布・居住する四川チベット族の概況とフィールドサーヴェイされた事例集落の報告である。従来この地域に関しては外国人研究者の研究業績も少なかったので貴重なものといえよう。しかし、フィールドサーヴェイをされた回数が少ないためか、チャン族ほど詳細な分析がみられない。今後著者のフィールドサーヴェイを中心とした研究に期待したい。

研究文献目録にはチャン族および四川チベット族に関する文献が多数収録されている。最近までの両民族に関するもっとも詳細な文献目録であると思われ、大いに利用価値がある。

以上簡単に全般にわたって要約し、問題点を指摘するのではなく、評者が興味・関心を有している項目を中心に問題点などを論じた。そのため、あるいは著者の意図することに反する指摘があったのではないかと恐れる。しかしながら、本書は西南中国に分布・居住する少数民族に関心をもつ人びとにとってはある面では画期的な書物であるといっても過言ではない。というのは、種々の制約が存在するにもかかわらず地味な努力を十年間継続して行なうならば、本書のような高水準の研究書が完成できるということである。この点は、近年若年研究者・大学院生を中心にイメージあるいはコンピュータによる分析などを中心に、フィールドサーヴェイを軽視するような一部の研究動向に対して警告を発したものといえよう。少数民族研究は、フィールドサーヴェイを基本とするという少数民族研究の原点にのっとった成果を集大成したものとして高く評価できる。

なお、文部省などの機関や各種の団体から多額の助成金を得てフィールドサーヴェイを実施することが増加している。これらの研究は助成金を得ている関係から長期間実施することが難しい。また中国は体制の問題もあり希望どおりの調査が実施できない場合が多い。そのため、不本意と思われるが調査の報告は研究書という形式で出版されることがあまりなかった。このような意味からも、ほぼ独力でフィールドサーヴェイを継続されてこられた著者に対し、大いに敬意を表するとともに、今後著者と同様の方法で研究を進めようとする研究者が続くことを強く望みたい。

（麗澤大学外国語学部教授）